

特集「音声言語情報処理とその応用」の編集にあたって

新 田 恒 雄[†]

今回の特集は、前回(平成11年4月)の「音声言語情報処理」特集から3年を経て企画された。この間の同分野の成果としては、日本語ディクテーションソフトウェアの商用化があげられる。また、本学会音声言語情報処理研究会(SLP)のワーキンググループ活動から始まり、IPA(情報処理振興事業協会)のプロジェクトで開発された「日本語ディクテーション基本ソフトウェア」は、SLPの「連続音声認識コンソーシアム」(発足時代表:鹿野清宏(奈良先端大学))に維持・改良が引き継がれ、多くの大学・企業研究者から支援を得ながら、音声認識研究の共有基盤の役目を果たしている。

音声言語情報処理の研究は、次の目標である音声対話の実用化に向けて、多様な音声・言語コーパスの整備と評価、音声およびマルチモーダル対話記述と対話システムの開発・評価などが精力的に進められている。SLPでは、後者の研究を加速するために、「擬人化音声対話エージェント」のワーキンググループを立ち上げ、現在、IPAのプロジェクトとして共有基盤の開発が行われている(代表:嵯峨山茂樹(東京大学))。

本特集では、音声言語情報処理とその応用に関連した最新の研究や開発事例を一括掲載することにより、会員に有意義な情報を提供するとともに、本分野の一層の研究推進と発展に寄与することを目標とした。編集にあたっては、学会のゲストエディタ制度を利用し、11名からなる特集編集委員会を組織して、論文の公募、査読、編集を行った。また論文公募では、基礎研究から音声インタフェースなどのアプリケーションまでを含む、様々な分野の論文の投稿を幅広く呼びかけた。投稿数は48編と、前回の23編を大幅に上まわった。投稿論文は、論文内容にふさわしい編集委員(幹事を含む)を1名選定してメタレビューとし、各メタレビューは査読者2名を割り当てて、査読者とともに査読を行った。厳正な査読の結果、26編が採録された。論文採録率は約55%であった。

採録された論文を分野別にみると以下のようなものである。音声特徴抽出・正規化・適応処理・その他の頑健な音声認識処理:4編、音声認識用言語モデル:4編、音声

言語コーパスとその応用:3編、音声対話:4編、音声合成・変換とその応用:3編、話者認識とその応用:3編、音声・マルチモーダルインタフェースの実装・評価およびその支援:5編。

音声言語情報処理の分野では、これまで音声処理と言語処理をうまく融合させた方式が成果をあげてきた。今回の特集では、さらに対話特有の構造や、システムの背後の知識を積極的に利用する論文が幾つか見られた。また音響処理を中心とする音声認識処理の分野でも、より頑健な認識を目指す論文が多数寄せられた。一方、今回は通常の情報処理学会論文誌には稀な、音声合成・変換、話者認識とその応用に関する論文も多く収録することができた。これらの論文では、内容もこれまでの合成や話者認識に、新しい考えを持ち込んだ意欲的なものが見受けられた。本特集では、学会に一般論文として投稿される関連論文の範囲を大きく拡大することができ、SLPの今後の指針を示したいという、編集委員会の当初の目的を達成したと考える。

本特集号が「音声言語情報処理とその応用」技術の発展に貢献し、また周辺領域の方々には本分野にご関心を持っていただく一助となれば幸いである。

最後に、本特集にご投稿いただいた著者各位、特集編集委員会の幹事・委員を務めていただいた各位、96名の査読者、学会事務局の各位に紙面を借りて深く感謝いたします。

「音声言語情報処理とその応用」特集編集委員会

- 編集長(ゲストエディタ)
新田恒雄(豊橋技術科学大学)
- 幹事
相川清明(NTT), 河原達也(京都大学)
- 編集委員(50音順)
伊藤克亘(産総研), 岡田美智男(ATR), 小林哲則(早稲田大学), 嵯峨山茂樹(東京大学), 鹿野清宏(奈良先端大学), 中川聖一(豊橋技術科学大学), 中村 哲(ATR), 畑岡信夫(日立)

[†] 豊橋技術科学大学大学院工学研究科